

小・中学校国語研究部

I 研究主題

読む力を確かなものにするための交流場面における指導の工夫

II 主題設定の理由

本研究部では、まず、研究員の基本テーマである「主体的に学習に取り組む」児童生徒を育成するにはどうすればよいかを考えた。日々、国語科の授業を行っている中で、私たちが感じている児童生徒の様子を考察してみると以下のような点が挙げられた。

- (1) 国語の学習は他の教科の学習に比べて挙手が少ない。
→文章からうまく読み取れない、自信がない、国語の学習が好きではないのではないか。
- (2) 読み取りの得意な児童生徒とそうでない児童生徒がはっきりしている。
→自力解決が難しい、叙述に即した読み方を知らないのではないか。

そこで、国語科の学習に対してどのように感じているかのアンケートを取り、傾向を調査した。(調査対象…小学3年生、4年生、6年生、中学1年生)

- (1) 国語科の学習はどの学年も「嫌い」の割合は低いが、学年が上がるに従って「好き」の割合が減少する。
- (2) 他の児童生徒の前で、自分の考えを言うことや発表することは、「好き」の割合が低く、どの学年でも苦手意識や抵抗感を持っていることがうかがえる。
- (3) 他の児童生徒の考えを聞くことはどの発達段階でも「好き」であるが、そのことによって自分の考えが深まるとは思わない児童が小学校では見られる。しかし、中学校では9割以上の生徒が他の生徒の考えを聞くことで自分の考えが深まると答えている。
- (4) 文章を読み、自分の考えを持つことに苦手意識を持つ児童生徒が見られる。学年が上がるにつれて顕著となる。

調査結果から、児童生徒は文章の読み取りを苦手であると感じ、発言や発表への抵抗感を持っていることが読み取れ、主体的に学習に取り組むことのできない原因となっていると予想できる。以上のことから、本研究部で以下の仮説を立てた。

- (1) 発言しやすく工夫された交流場面を取り入れることで、考えが確かになったり深まったりするであろう。
- (2) 適切な「単元を貫く言語活動」を取り入れることで、児童生徒が主体的に学習（交流）することができるであろう。

III 研究の内容

1 研究の方向性

国語科の学習のねらいの達成について十分配慮しながら、研究を進めていく。

- (1) 発達段階に応じた交流の工夫

児童生徒の発達段階に応じた交流の仕方を工夫する。

小学校学習指導要領解説には、中学年では「文章を読んで考え、まとめたことを発表し合い、互いの感じ方や考え方の違いに気付く」、高学年では「課題について学習し、考えたことが、どのように共通していたり相違していたりを明らかにしながら自分の考えを広げたり深めたりする」とある。また、中学校では、「文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方をひろくすること。」とある。

そこで、発達段階に応じた交流の仕方を研究していく。

(2) 適切な単元を貫く言語活動の設定

児童生徒が主体的に学習に参加するためには、学習意欲を高める工夫が必要になってくる。そこで、適切な「単元を貫く言語活動」を設定することで、1時間ごとの課題が明確になると考えられる。児童生徒が、課題に対する必要感、必然性を持ち、学習（交流）に対して進んで取り組む意欲が高まるような言語活動の在り方を研究していく。

2 研究の経緯

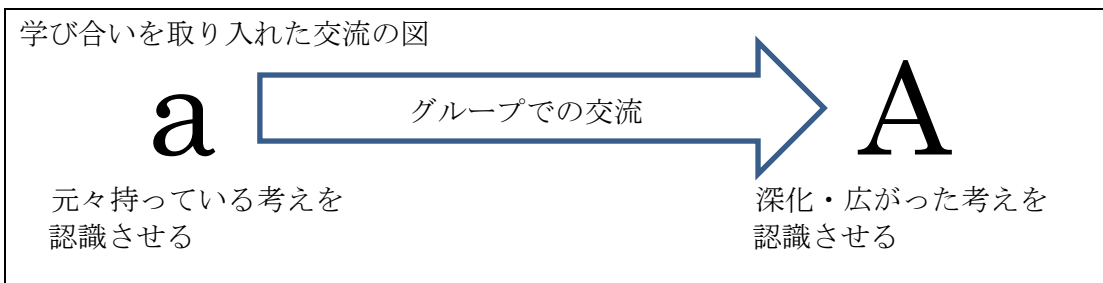
本研究部では、10月に行った提案授業を皮切りに、1人1回、授業実践を行った。それぞれの授業実践について課題を踏まえた研究協議を実施し、次の授業実践に向けた指導案検討を行った。また、児童の変容を確認するために事前・事後のアンケート調査を行った。第2回目の授業実践では、樺山先生にもご参観いただき、ご指導を受けることができた。

IV 実践例

1 小学校第6学年の事例（教材名「やまなし」）

(1) 「交流場面」を取り入れた授業展開の工夫

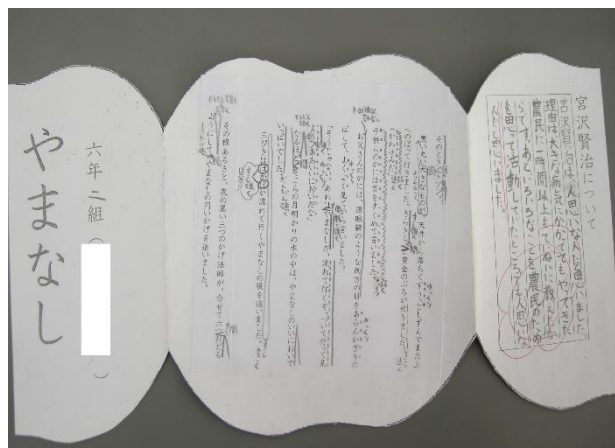
6年生における「交流場面」のねらいは、文学的な本や文章等を読み、目的に応じて考えをまとめ発表し合うことで、課題について考えたことが、他者とどのように共通していたり相違していたりするのかを明らかにしながら「自分の考えを広げたり深めたりすること」につなげることである。そのために、グループ等で互いの考えを聴き合いながら、課題に対して児童自身で解決していくための「学び合い」活動を交流場面として設定した。本研究部で考えた「学び合い」とは、児童生徒が授業の中で自分の考えを持ち、それを発表したり、友達の考えを聴いたりしながら、考えを深めたり広げたりすることのできる活動のことである。



(2) 単元を貫く言語活動の設定

児童の実態、教材の特性から、「自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること（C 読むこと（1）ア）」を中心として指導した。この事項を指導するために、宮沢賢治

の作品を朗読する「朗読ボード」作成を通じた学習を行った。これは、宮沢賢治の多くの作品の中から、お気に入りの作品を選び、他者にその作品の魅力が伝わるように朗読するための資料を作成するというものである。そのために、まず、教科書教材である「やまなし」のあらすじや登場人物をおさえ、登場人物の相互関係や心情、場面をとらえ、作品中の優れた叙述についての



自分の考え等を1枚のボードにまとめる。さらに、「イーハトーヴの夢」や作者の他の作品を読むことで、作者のものの見方や考え方を学んだり、他の作品にもある独特の表現に触れたりして、「やまなし」の朗読に生かしていく。次に、他の作品の中からお気に入りの作品を選び、「やまなし」の読み取りや朗読の仕方を生かしてその魅力を伝えることができるような朗読ができるようになると考えた。

第1次	第2次		第3次
・ 教師作成の本の朗読ボードによる作品の朗読を聞く。 ・ 単元の見通しをもつ。	・ 「イーハトーヴの夢」を読み、宮沢賢治のものの見方や考え方を学ぶ。 	・ 「やまなし」を読み、五月と十二月の違い、情景や作者の思い等を考えることによって、作品の読み方を学ぶ。   	・ 読み方を活用しながら、作者の他の作品についての朗読会を行う。
	・ 「やまなし」の朗読ボードを作成し朗読する。		

宮沢賢治作品を並行読書する

宮沢賢治作品を並行読書する

(3) 成果と課題

単元を貫く言語活動を設定したことで、活動の目的や見通しについて、児童の意識を高めることができた。「学び合い」活動を取り入れた交流場面では、児童の考えに変容が見られた。アンケートの結果でも、「話し合う」「考えを聞く」「発表することで深まる」など多くの項目での改善が見られた。初めのアンケートでは「自分の考えを発表しても、自分の考えは変わらないと思うから」という理由で、発表することに意味を見出していなかった児童が、実践後のアンケートでは「自分が持っている考えより深い考えを持っている人が必ずいる」と、発表する意欲を向上させていた。

課題としては、「単元を貫く言語活動」を取り入れていくには、単元の指導時数を十分設定しないと、教材の読み取りが浅くなる可能性がある。

2 小学校第4学年の事例（教材名「ごんぎつね」）

(1) 「交流場面」を取り入れた授業展開の工夫

本単元では交流する活動を重視し、自力問題解決→グループ活動→全体活動を通して、「聴き合い」「学び合い」を通じた授業を展開し、より主体的に児童が学習に取り組むこ

とができると考え実践した。以下のような問題解決学習の流れを設定しておくことで、児童がスムーズに学習に取り組めるのではないかと考えた。

《学習の流れ》

1	課題をノートに書く
2	音読をする。
3	解決の見通しをもつ ・前場面までの関係づけ ・情景描写 ・登場人物の心情の移り変わり
4	一人学びをする。(前時までの振り返りとワークシートへの書き込み)
5	グループで交流する。
6	全体学習をする。(クラスでの話し合い)
7	学習のまとめをする。(リーフレットに記入)
8	本時の感想を書く。

(2) 適切な単元を貫く言語活動の設定

本単元では、学習指導要領「C 読むこと」における指導事項「ウ」「オ」、言語活動例「イ」を受けて、「オススメしたい本のリーフレットを作ろう」という手立てを設定した。初めに、「ごんぎつね」の物語の読み取りを行い、リーフレットを作成する。その後、並行読書をしている新美南吉の本から、薦めたい本を選び、リーフレットを作成する活動となっている。リーフレットに書く内容としては、あらすじ、主人公の紹介、登場人物の紹介、気に入った場面・言葉、感想などが挙げられる。リーフレットに書く内容が決まったら、読み取りの学習計画を作成していく。児童が学習の見通しを持つことで、主体的に学習に取り組む意欲をもつことができる。

(3) 成果と課題

毎時間交流する時間を確保したことで、発表が苦手だった児童も他の児童の考えを聞いて同じところや異なることを少しずつ発表することできるようになった。その結果9月と11月に実施したアンケートを比較すると、「グループで自分の考えを発言することは好きだ」の問いに「はい」と答える児童の割合が62%から71%に増えた。「聴き合い」「学び合い」を目標とした交流学習は、より主体的に学習に取り組めることがわかった。

グループ交流の活動が、個々に意見を出すだけになってしまい、意見がまとまらない話し合いになるグループが多かった。結果、考えを共有する時間でも、収束することなく確認するのみにってしまった。また、発表できたことに満足してしまい、他者との考えの共通点や相違点をもとに話し合うところまでは至らなかった。他者の意見から自分の考えを深めるための具体的な助言や手立てを講じ、支援していく必要性を強く感じた。

3 中学校第1学年の事例（教材名「シカの『落ち穂拾い』—フィールドノートの記録から」）

(1) 「交流場面」を取り入れた授業展開の工夫

本単元では、学習指導要領「C 読むこと」の「オ 文章に表れているものの見方や考え方をとらえ、自分のものの見方や考え方を広くすること。」を、主に生徒に身に付けさせ

たい力として指導した。これは、小学校第5学年及び第6学年の「オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること」などを受けている。小学校では指導事項が「自分の考えの形成及び交流」であったのに対し、中学校では「自分の考えの形成」のみになっている。しかし、小学校で身に付けた能力をもとに、交流を通して考えを形成できるようにしていくことを目指した。

交流の手だてとして次の2点を考えた。

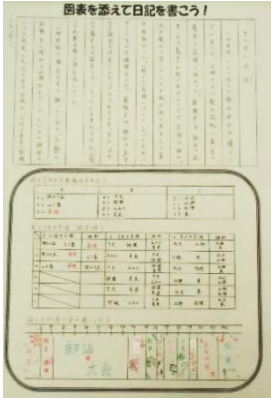
- ① 読解において生徒に考えさせる場面の随所で、座席は変えずに周囲の生徒(4人組)と交流する機会を設ける。そのうえで、発表させる。
- ② 主発問等、時間をかけて交流する場合は、4人組の班隊形にする(座席に準じた集団であるため、成員は「異質」である)。

(2) 国語科における言語活動(単元を貫く課題解決的な活動)

「図表を添えて日記を書く」活動

具体的には、学習指導要領解説「B 書くこと」の言語活動例「イ 図表などを用いた説明や記録の文章を書くこと。」を通して、指導した。記録の文章では、日時や場所、大事な出来事などの具体的で、正確な記録が重要であり、効果的な図表を添えることでわかりやすさが増す。

本文の読解を通して学んだことを生かし、実際に書く活動を行った。



第1次	・図表を添えた日記の完成した例を提示し具体的なイメージを持つ。 ・単元の見通しを持つ。
第2次	・本文の読解を通して、図表の効果的な使い方について学ぶ。
第3次	・図表を添えた記録の文章として、日記を書く。
第4次	・少人数のグループで、各自の文章の批評をし合う。

(3) 成果と課題

7月と11月で同じアンケートを実施した結果、交流に関する項目の全てにおいて、肯定的に考えている生徒の割合が高まっていた。特に、「話合いで意見を言うと自分の考えが深まる」と考える生徒は、73%から84%と、11%分増加した。

しかし、「文章の内容を読み取ることは得意」と考える生徒の割合には変化がなかったため、研究主題にある「交流」によって「読む力を確かなものにする」ことの成果は明らかにならなかった。今後は、交流と読解の関連性を深めるための指導の工夫が必要である。

単元の終わりに、以下の4つの質問を行い、それに対し「できた」「だいたいできた」「あまりできなかった」「できなかった」の4択で振り返りを行った。「本文の図表と文章の対応が分かったか」93%、「記録の文章に必要なことがわかったか」91%、「効果的な図表を用いて、記録の文章(日記)を書くことができたか」82%、「グループでの交流を通して、より効果的な図表の使い方がわかったか」91%の生徒が「できた」もしくは「だいたいできた」と考えていた。

したがって、本文の読解を通して、記録の文章について理解を深め、実際に図表を効果

的に使った記録の文章を書くことができていただろう。また、その後の交流を通して、より効果的な図表の使い方を身に付けられたと考えられる。

4 小学校第3学年の事例（教材名「三年とうげ」）

（1）「交流場面」を取り入れた授業展開の工夫

3年生における「交流場面」のねらいは、低学年の「オ 文章の内容と自分の経験とを結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。」を受けて、「文章を読んで考え、まとめたことを発表し合い、互いの感じ方や考え方の違いに気づくこと」につなげることである。そのために、グループ等で互いの考えを聴き合いながら、課題に対して児童自身で解決していこうとする「学び合い」の活動を交流場面として設定した。

交流の手だてとして、次の3点を考えた。

- ① ホワイトボードを活用する。一人一人の意見を視覚的に見やすくする。また、そこにペンで書き込んでいくことで、まとめまでの思考過程を残し、振り返りやすくする。
- ② 司会者用カードを活用する。司会者が話し合いを進めていくことで、順番に一人一人が意見を言えるようにするとともに、話し合いが円滑に進むようにする。
- ③ 聞き取り名人カードを活用する。聞き方名人となって聞くことで、発表者が安心して意見を言える雰囲気づくりをする。

【ホワイトボードを用いた交流】



【司会者カード】



（2）適切な単元を貫く言語活動の設定

児童の学習意欲を喚起するような活動を設定する。常にゴールを意識し、そのゴールに向けて意欲的に活動できるような言語活動を設定する。

（3）成果と課題

ホワイトボードを活用することで、聞くだけではなく、視覚的に他の児童の考えが見やすくなり、自然と意見も活発に出るようになった。また、ホワイトボードは書いたものをすぐに消すことができるので、話し合いながらまとめることができ、まとめが変わった時の修正もしやすく、時間内に話し合いを終えることができた。また、一人一人が主体的に学ぶ姿勢が見られるようになった。

司会カードがあることで、全員が自信を持って話し合いを進めることができた。また、司会が形式的に始めることで、話し合いがスムーズに進められた。

聞き方名人カードはあいづちやうなずき方を示したものである。自分の話に耳を傾け、目を見て聞いてくれることで、全員の前では自信を持って意見を言えない子でも、安心して発表することができた。

本の帯を作るというゴールに向かって意欲的に授業に臨めた。場面ごとの話の内容の整

理も行うことができた。しかし作成に時間がかかり、予定時間数を超えてしまった。今後は、単元を貫く言語活動と活動計画の兼ね合いを考えて可能な活動を設定していきたい。

Ⅴ 研究のまとめと考察

1 発達段階に応じた交流の工夫

小学校における交流では、学習指導要領に示されていることをもとに、以下のような方を取り入れた。

- (1) 個人での読み取りの時間を設ける。
- (2) 課題について自分の考えを持たせる。
- (3) グループで交流させる。
- (4) 話し合いが円滑に進むよう、発達段階に応じて、司会カードや教室掲示に沿って進行させる。
- (5) 「交流の視点」を与え、他者との共通点や相違点を見つけさせる。
- (6) グループの交流学习の内容を全体で共有する。

交流することで考えが変容していくというプロセスを経る必要がある。そこでまず、課題に対して自力で解決させてから、グループ交流の場を設定するようにした。グループ交流では、自分と他者の考えの共通点や相違点を見つけた上で話し合わせることで、児童生徒一人一人の考えが形成されたり、変化したり、深化したりすることを期待した。その後、グループから全体に戻し、教師を要として考えを伝え合うようにし、最終的に自身が初めに持っていた理解が交流を通してどのように変容したのかを確かめさせることで、自身の力の向上を意識させることができた。

中学校における交流でも、学習指導要領に示されていることをもとに、以下のような方法を取り入れた。

- (1) 「筆者の考え」と「事実」を整理しながら、個人で読み取る時間を設ける。
- (2) 課題を明示し、自分の考えを持たせる。
- (3) グループでの交流は、他者の考えを聞いたり、自分の考えに対しての意見を受たりさせる。

まずは、書き手のものの見方や考え方を捉えさせるため、整理しながら読んだ上で自分の考えを持たせた。その後、グループで交流する場を設けて、読み手としてのものの見方や考え方を広げられるようにした。交流場面を日常的に取り入れることで、交流によって見方や考えを広くすることを習慣化させることができた。

＜グループ編成の工夫＞

小学校4年生、小学校6年生、中学校1年生の実践では、交流する際に、佐藤学先生が提案している「無作為な男女混合4人グループ」を作成した。そのことでお互いが対等であり、お互いの考えを発表し合える場を設定することができた。男女混合の方が、学びが成立しやすいこと、4人でグループを編成すると、交流に参加できない児童生徒が発生しにくいと考えた。

小学校3年生の実践では、樺山先生の指導を受け、意図的な4人グループを作成して交流

を行った。意図的なグループとは、学習の習熟度の異なる4人が組むグループである。習熟度の異なる4人が話し合うことで、自分の考えが持てない児童が、自分の考えを持てるようになった。自分の考えを持つことができていた児童は、友達の意見を聞いて自分の考えと比べられるようになった。さらに、習熟度の高い児童は自分の意見と友達の意見を比較し自分の意見を深められるようになった。

2 適切な単元を貫く言語活動の設定

本研究部の実践において、学習計画に「単元を貫く言語活動」を位置づける際に以下の点に留意した。

(1) 学習の見通しと振り返りを持てるようにする。

学習の見通しを持つことができるようにするために、単元計画表を作成し毎時間の学習活動に対して振り返りをさせた。また、単元計画表を拡大したものを教室前面に掲示し、今どこを学習しているか、次にどんな学習をするかを毎時間確認できるようにした。



(2) 付けたい力を明確にする。

題材から児童にどんな力を付けたいのかを吟味し、それに合わせた言語活動を選択させた。

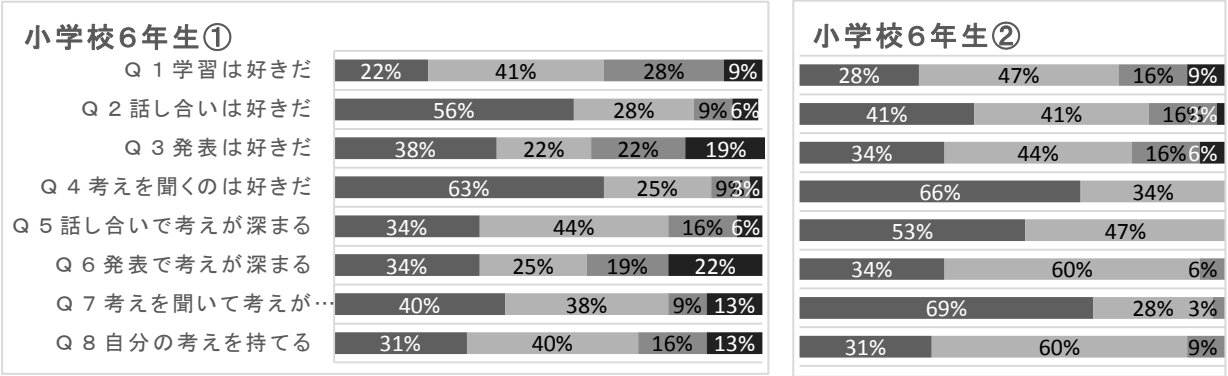
(3) 児童の学習意欲を喚起する。

児童が思わずやってみたいと思うものや、やってみることで自分の力が伸びると実感できるものを単元の導入で紹介した。本研究部では、やまなしの朗読ボード、薦めたい本のリーフレット、図表を添えた日記、本の帯などの作成を手立てとして取り組むようにさせた。その際に、作成に時間がかかるものや、言語活動自体が目的のようになってしまうと、「活動あって学びなし」になるので、あくまでも、言語活動は活用手段として設定するようにした。

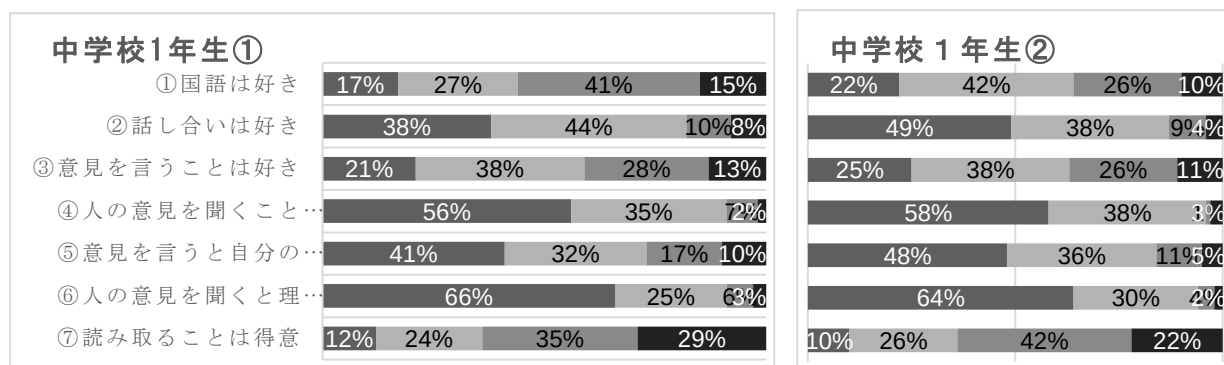
3 児童の変容

(1) アンケート結果の考察

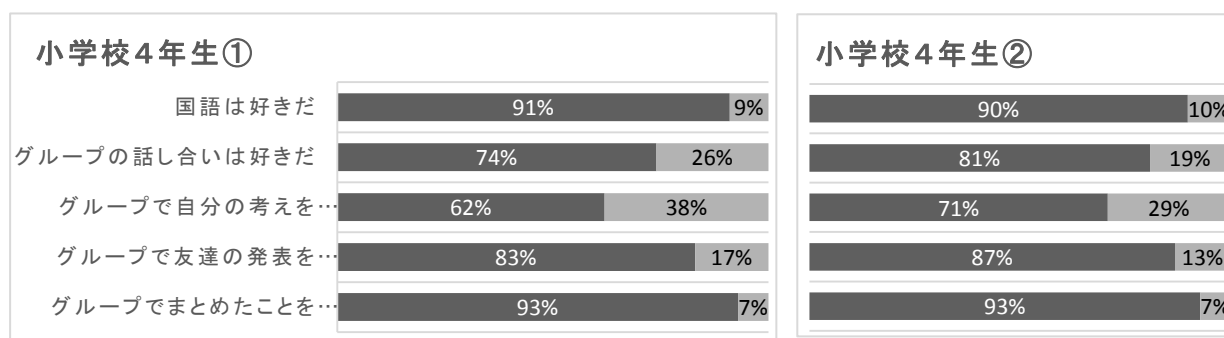
本研究部では、7月と12月に研究主題に関わるアンケートを実施した。(左から順に肯定的な回答)



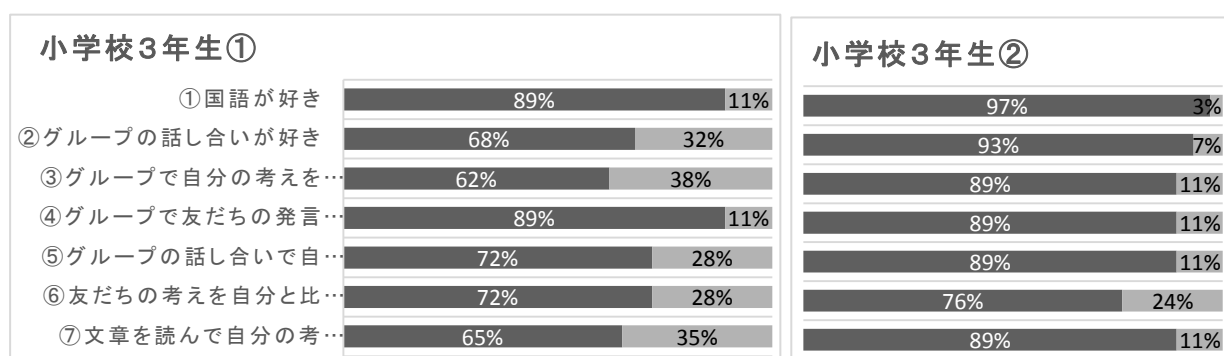
小学校6年生のアンケート結果では、7月の段階に比べて12月の結果ではほぼ全ての項目で改善が見られた。特に、Q4以降の、交流が学習に良い影響を与えると考えると答える児童が大きく増加した。7月の段階では、苦手あるいは嫌いだと答えていた児童が12月の段階ではほぼ、得意あるいは好きだと答えている。本単元以降の交流の際にも積極的な参加が見られるようになった。



中学校1年生では、もともと多くの生徒が交流に対して効果的だという考えを持っていたが、実践後のアンケートでは、国語の学習が好きや話し合いが好きという項目で伸びが見られた。また、⑦の文章を読み取ることが得意だという質問に対しては、「得意」の割合はあまり変化していないが、「とても苦手」と感じている生徒が減少した。



小学校4年生では、全体的に改善が見られた。7月の段階でも意欲的な児童の実態が見られたが、12月の段階では特に交流に対する意欲が増加した。



小学校3年生では、全体的に改善が見られた。7月の段階で、多くの児童が国語を好きと答えていたが、12月の段階でほとんどの児童が国語を好きだと答えるようになった。

また、学習における交流活動の良さを児童が実感できるようになった。さらに、文章を読み取ることができると感じている児童が65%から89%と大きく増加した。

各学年のアンケート結果から、全体的に国語学習への意欲や交流の有用感が向上したことが読み取れる。

(2) テストや授業の様子の考察

今回の実践後に行った単元テストの結果は、同単元で行っていないので単純に比較できないが、小学校3年生では、平均91点、小学校4年生では86点、小学校6年生では平均93点と1学期に行った単元テストに比べ、高得点になった。また、解答を見ても、普段簡単に済ませてしまう児童が、叙述に即した模範的な解答をしたということがあった。このことから、児童の読み取る力が高まったといえる。

中学校では、単元テスト等で単純に比較することはできないが、生徒が記入しているノートの内容や別の単元の学習をしている際の生徒の様子から、効果が感じられた。

本実践で身に付けた力を、どの学年においても次の単元で活用している姿を見ることができた。特に交流の場面、発表の場面では積極性が増したように感じられた。挙手の増加が見られ、交流に慣れたことで意見交換が活発になった。

VI 今後の課題

単元を貫く言語活動や交流を設定することにより、活動内容を充実させることに伴って、授業時間数も年間指導計画より多くなった。今後は、年間指導計画に示されている適切な時間数で可能な単元を貫く言語活動を設定できるよう、交流における発問を厳選し、短時間で効果的に行えるようにする。

研究の成果は前述の通りだが、アンケートやテストの結果を見ると、読むこと苦手意識や交流への意欲向上について効果が現れない児童生徒も見られた。今後は、そのような児童生徒に対しても効果的な手立てを検討していく。

《参考文献》

実践ナビ！言語活動のススメ モデル30	樺山敏郎	明治図書
学校の挑戦…授業を創る、学びが変わる	佐藤学	小学館
小学校国語 豊かな言語活動を図る単元の構想	横浜市小学校国語研究会	東洋館出版社
交流 広げる・深める・高める	日本国語教育学会	東洋館出版社
「単元を貫く言語活動」を位置付けた		
小学校国語科学習指導案パーフェクトガイド	水戸部修治	明治図書